

兵士の戦場と郷土の戦争認識

——明治・大正期の富山県東部の場合

村上 邦夫

はじめに

- 1 富山県の兵士
 - 2 郷土における戦争認識
- おわりに——「15年戦争」論と「植民地戦争」論

はじめに

2014年の春過ぎから富山県東部にある下新川郡入善町及び同郡朝日町居住の有志で、地元ゆかりのある作家の小説にふれ、それが原作となった篠田正浩監督の映画「少年時代」の上映会などを開催した。そのなかで2016年春に「昭和史セミナー」(以下、「セミナー」と称した歴史同好会が発足した。発足当初は、太平洋戦争や日中戦争、富山大空襲、満蒙開拓団など専ら戦前の昭和期について学習を深めた。セミナーは6年経過したが、時々話題にあがる1冊がある。それは半藤一利『昭和史1926-1945』(平凡社、2009年6月)である。

半藤の歴史認識は次の一節に端的に示される。「[「攘夷のために開国」から……3年後、……すぐに明治の時代がはじまって、人びとが一所懸命に国づくりをはじめます。世界の国々に負けないよう……植民地にならないようにと、……とにかく急いで、いってみれば少々の無理を承知でいくらか背伸びした国家建設を懸命にやったわけです。それがある程度うまくいきまして、つまり植民地にならずに日本は堂々たる近代国家をつくることに成功したわけです」⁽¹⁾。

対外戦争を繰り返し多くの日本人を死に追いやったことにとどまらず、特にアジア諸国の国土を蹂躪し、民衆を殺傷し、武力統治・植民地支配を続けたことをこの作家は、「少々の無理をして、背伸びした国家建設を懸命にやった」というのである。昭和以前にできた「堂々たる近代国家」、「強国になった日本を保持し、強くし、より発展させるためにはどうしても朝鮮半島と満州を押さえておかなければならない」⁽²⁾と。ところが昭和は、「陸軍が張作霖事件で昭和4年に「沈黙の天皇」をつくりあげ、昭和をあらぬ方向へ動かし」⁽³⁾、「海軍も翌年のロンドン軍縮条約による統帥権

(1) 半藤一利『昭和史1926-1945』p.13。

(2) 半藤前掲書、p.26。

(3) 半藤前掲書、p.50。

干犯問題をきっかけに、……強い海軍が出来上がっていく」⁽⁴⁾。「この辺が、昭和史のスタートの、どうしようもない不運なところ」で、「昭和がダメになったスタートの満州事変」⁽⁵⁾は、満州国の建国という関東軍の野望の達成だったと非難する。

昭和の戦争とは、陸軍（関東軍）と海軍（艦隊派）が暴走し、全面降伏に至ったとする見方の期間だけとれば「15年戦争」論を髣髴とさせるが、明治・大正期の日本の侵略戦争と植民地支配を不問にするわけにはいかない。この点は最後にふれる。

本稿は、前半では明治・大正期における富山県東部の兵士が派遣された戦場、戦争を明らかにし、後半ではそれが郷土でどのように認識されているかを、自治体が戦後発刊した郷土史本で検討する。その過程で半藤のいう「堂々たる近代国家」の真相も明らかになるであろう。

まず、明治・大正期における郷土兵の成立と軍事行動の2側面からみていこう。

1 富山県の兵士

(1) 富山県兵士の“誕生”

①金沢に名古屋鎮台の分営設置

1873（明治6）年2月、名古屋鎮台の分営が旧金沢城内に設けられ、4月、陸軍から藤堂高矩大尉が歩兵1小隊を率いて金沢城に移駐。11月、名古屋から歩兵第21大隊が金沢に駐屯した。これが北陸で初となる歩兵第7連隊の基礎隊となった。この1873（明治6）年は、新川県⁽⁶⁾も名古屋鎮台金沢営所の所管になった年でもあり、新川県から陸軍省の徴用に応じ兵役に服した者は175名であった。

1874（明治7）年3月、徴兵署が開かれ、高岡、杉木（砺波）、魚津で徴兵検査が行われた。9月、陸軍省の命令によって富山県から補充兵50名が金沢営所に入営した。下立村（旧宇奈月町、現黒部市）の瀧川弥三右衛門の弟瀧川藤次郎も補充兵の一人で、右図1の兵営番号割符にある「満期」の印から常備兵として3年間服したことがわかる⁽⁷⁾。

一方、同年11月、富山県の常備砲兵40名を東京鎮台の臨時徴兵募集に応じて入営させた。この年、徴用により兵役に服した者は423名であった。

②金沢に歩兵第7連隊成立

1875（明治8）年3月、富山に徴兵署が開かれ、杉木（砺波）と魚津に検査場を設けて兵丁検査

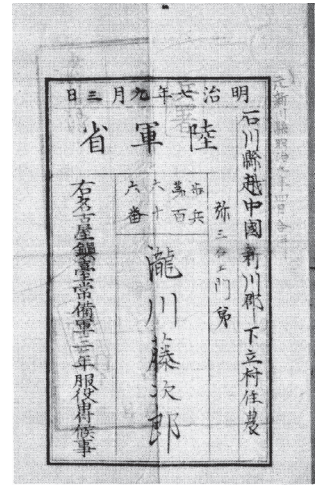


図1 兵役番号割符(明治7年)
出典：『追録宇奈月町史歴史編』
1989年，p.474。

(4) 同前。

(5) 半藤前掲書，p.53。

(6) 本稿が扱う富山県東部は、1871（明治4）年11月以降、新川県となったが、1876（明治9）年4月からは石川県に属した。その後、分県運動もあり、1883（明治16）年5月に富山県となり今日に至っている。

(7) 『追録宇奈月町史歴史編』（宇奈月町，1989年）p.474。

が行われた。同月28日、金沢に歩兵第7連隊が設置され、4月から金沢管区に徴兵令が実施された。徴兵令はこのように全国一斉に実施されたわけではなく、東京鎮台管区から順次拡大されていった。そのなかで歩兵第7連隊は、翌1876（明治9）年3月までに3個大隊の編成を完了した⁽⁸⁾。

4月25日、新川県から新入営兵190名が金沢の歩兵第7連隊に入隊した。この年陸軍省の徴用に応じ、兵役に服した者は321名であった。

(2) 富山県兵士の国内軍事行動

本稿が対象とする地域は、戦後の行政区分では、魚津市、黒部市、入善町、朝日町にまとまった富山県東部にある。戦前の行政区分では、以下の2町17村である（図2、カッコ内の名称は現在の行政単位）。

大家庄村（朝日町）、旧入善町（入善町）、上原村（入善町）、青木村（入善町）、飯野村（入善町）
 新屋村（入善町）、棚山村（入善町）、横山村（入善町）、小摺戸村（入善町）
 旧舟見町（入善町）、野中村（入善町、一部朝日町）、前沢村（黒部市）、大布施村（黒部市）
 浦山村（旧宇奈月町、現黒部市）、下立村（旧宇奈月町、現黒部市）
 内山村（旧宇奈月町、現黒部市）、愛本村（旧宇奈月町、現黒部市）
 西布施村（魚津市）、片貝谷村（魚津市）

この2町17村における兵士の戦死状況は「資料」としてリスト化し、文末に掲載した。

なお、郷土兵の起点を歩兵第7連隊としたので、鎮圧に藩の鉄砲隊が出動した1869（明治2）年10月の世直し大一揆「ばんどり騒動」は考察の対象としない。

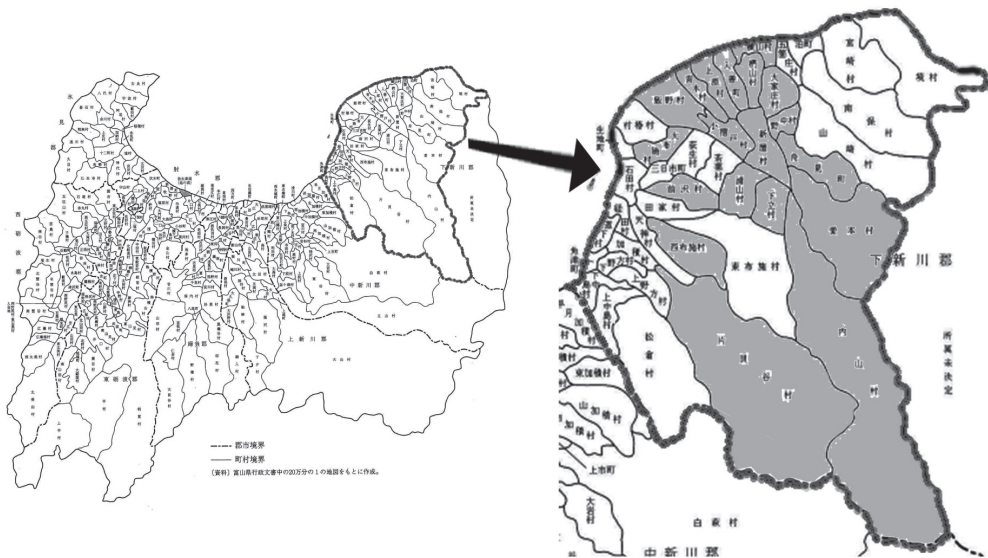


図2 2町17村

出典：「富山県の市町村行政区画の変遷」（大正5年7月）『ふるさと富山の歴史館』（富山新聞社、2001年、p.496）。

(8) 『富山聯隊史』（編集・発行、富山聯隊史刊行会、1986年）p.17。

・歩兵第7連隊成立後最初の出勤——砺波騒動

明治初期、1875（明治8）年1月から翌年3月にかけて、これまで小作人の記名が必要であった「地価取調帳ひな形」が取り消され、地主名のみを記入を求める「地価取調帳」が布達された。これにより従来の慣行で農民が得ていた小作権が揺さぶられ、農民に大きな不安が広がった。さらに政府の地租減額が地主に恵みをもたらす一方、農民の小作料軽減に繋がらず高額地租が継続した。そのため現在の富山県砺波市から高岡市にかけての地域の農民らは、しばしば200人ほどが集まり、県や内務省に請願したが、石川県は1876（明治9）年12月、県告23番で小作人への告諭⁽⁹⁾を、県告24番で地主に告諭を出したが、小作権侵害に対する不安が解消されず、小作料減額の方途も示されなかった。1877（明治10）年1、2月、石川県権令代理や庶務課長ら官員10名と巡查30名が戸出町（現高岡市）の寺の会場に向き村総代らを説得した⁽¹⁰⁾。権令代理らの説得でまとまる気配も見せたが結局は決裂し、外にいた小作人多数による騒擾が発生した。この砺波騒動に金沢から歩兵第7連隊第1大隊（古川潔少佐指揮）約千人が派遣され、2ヶ所に駐屯した。騒擾の首謀者3名は、それぞれ懲役7年、同5年、罰金7円5銭の刑に処せられた。地元史は、派遣された第7連隊「古川大隊は民衆と衝突はしなかったが、その出勤は騒動鎮圧に大きな効果があった」⁽¹¹⁾と指摘している。この砺波騒動は地租改正一揆⁽¹²⁾であり、郷土兵による威嚇的な鎮圧だったとあって良い。

・西南戦争

砺波騒動と時期を同じくして、1877（明治10）年1月末に最大で最後の士族反乱である西南戦争が起きた。1万5千の薩摩軍が鹿児島を出発して、2月15日熊本県に侵入した。政府は、2月19日各鎮台に討伐命令を出し、名古屋鎮台の軍管区から歩兵第6連隊と金沢分営の第7連隊が出動した⁽¹³⁾。この戦いで金沢第7連隊の戦死者は、粕谷陸軍大尉をはじめ324人であったが、この内、現在の富山県に属する地域の戦死者は103人であった⁽¹⁴⁾。また下新川郡から従軍した者は17人（下士1、兵卒16）で戦死3人、病死2人、負傷2人が出た⁽¹⁵⁾。

(9) 土地は地主の所有物であり、地主・小作人間の話し合いで決めるべきで、政府が決める筋合いはない。地価帳とは地主が地価・収穫を記して記名するもので、小作人が記名するものではないとした。

(10) 自衛隊第10師団編『第9師団戦史』（1966年、pp.3-4）は農民に同情的である。その上で、竹槍を持った小作人に身ぐるみ剥がされた警察係官が「権令に一部始終を細く報告し、「この暴動は巡查の20人や30人では到底抑え切れるものではない、どうしても軍隊の力を借りねば一」と進言した」結果、権令が「金沢営所の歩兵第7連隊に出動を要請した」。

(11) 『富山県史近代上』（富山県、1981年）p.201。

(12) 砺波騒動のような地租改正反対一揆のほかに、西日本を中心に徴兵反対一揆が、1873（明治6）年から1874（明治7）年にかけて起きた。これを別名、「血税一揆」というが、1873年に数万人が参加した北条県（現岡山県）の一揆では、県令が大阪鎮台に鎮圧援助を要請し、第10大隊2個小隊が1日で一揆農民を鎮圧している。徴兵令直後にかけて発生したこれらの農民一揆に対して、編成されたばかりの軍隊が出動し、鎮圧したことは、ひとたび中央政府軍が確立すれば、その対立勢力を「暴徒」と規定し、討伐・鎮圧対象になることを示している。

(13) 先発した第7連隊第2中隊は博多で福岡県士族を撃破した後、熊本に入り、緑川上流の砥用町から山を越え球磨川上流に、さらに宮崎県米良荘に入り太平洋に出た。残敵掃討の戦闘を繰り返した後、反転して元の道を辿り、8月末熊本南部の人吉町に着き、南進して9月28日鹿児島に到着した時はすでに城山が陥落して数日たった。

(14) 「西南の役関係御祭神名簿」。

(15) 『下新川郡史稿』上巻。

平成合併前の旧黒部市からの参加者は、前沢村3人、若栗村3人、荻生村1人、尾山村1人、牧野村1人、生地村1人、石田新町村1人の計11人である。また旧黒部市以外は、下立村2人と音沢村1人（戦病死）、入善町浦山新1人（戦病死）、魚津市・蛇田村1人（戦死）の5人が参加⁽¹⁶⁾しており、16人の兵士の氏名が明らかになったことになる。

・大正の米騒動とその後——富山では取り消された出動命令

従来は1918（大正7）年夏に始まったとされた米騒動だが、近年の研究によりそれは誤りで、大戦後米騒動は、前年の1917年6月に始まっていた⁽¹⁷⁾。ただし軍隊への出動命令は、1918（大正7）年8月から9月上旬に集中しており、その出動地点や、のべ動員兵力数については今日も調査研究が続いている⁽¹⁸⁾。そのなかで富山県の米騒動の場合も第9師団歩兵第69連隊に出動命令が出されていた。証言によれば、その時期は8月10日前で、1個中隊150名が二手に分かれ、魚津と水橋、その他の地点に行くことになっていた。兵士1人に実弾30発が渡され、兵営で1時間ほど整列待機していたところ、命令が解除になった⁽¹⁹⁾。折しもシベリア干渉戦争に動員される時期と重なり、九州、山口などではシベリア行きの演習を兼ねているのではないかと巷間、噂されたという。その後も民衆運動を弾圧するために軍隊の出動は続き、この年の9月、三井・三池炭鉱争議の採炭夫鎮圧に軍隊が出動した。さらに1921（大正10）年夏の川崎造船・三菱造船争議鎮圧に向け軍隊が出動したが、銃口は植民地から渡日してきた朝鮮人にも向けられた⁽²⁰⁾。

(3) 富山県兵士の対外軍事行動

明治政府は成立時から対外侵略を企図し、政府内で渦巻く征韓論⁽²¹⁾は一旦退けられたものの、それは、内治優先論者の大久保利通らが時期尚早と判断しただけであり、明治6年の政変後、早速「台湾出兵」を強行した。その翌年に朝鮮の江華島で雲揚号による軍事挑発を起こし、朝鮮に不平等条約を押し付けた。その後も、清朝宗属関係を無視した挑発を行い、朝鮮の旧軍兵士の待遇不満に端を発した1882（明治15）年の壬午軍乱では日本公使館が襲われ、公使らが外国船に助けられ帰国した。その2年後の1884（明治17）年には、親日開化派に竹添公使らが協力して起こした甲申政変も失敗した。

こうして明治の対朝鮮外交は行き詰まり、国会でも1892（明治25）年以降、政府提案の予算案

(16) 『黒部市史歴史民俗編』pp.44-45。

(17) 『入善町史通史編』p.475、井本三夫『米騒動という大正デモクラシーの市民戦線』（現代思潮新社、2018年）「総論」の図0-1、及びp.34の四 第一次大戦末米騒動の構造と時期区分。

(18) 吉河光貞『所謂米騒動事件の研究』は、「合計約60市町村の多きに達し……」。井上清・渡部徹『米騒動の研究第1巻』（1959年）、江口圭一「3府23県の34市49町24村、計107ヵ所に延人員5万7千名以上の軍隊が出動した」、松尾尊兌「軍隊出動地点120ヵ所、のべ動員兵力9万2千名」。『入善町史通史編』は、「（全国-引用者）わずかに数県を除き、鹿児島県から北海道空知郡の炭鉱まで（狭義米騒動と暴動化した争議だけを数えても）370件前後、……シベリア出兵を上まわる10万2千の軍隊」（p.478）。

(19) 井本三夫『水橋町の米騒動』（桂書房、2010年、pp.180-187、証言29 横山藤吉さん「連隊に出動命令が出ていた」）、『入善町史通史編』pp.478-479。

(20) 1923（大正12）年9月1日の関東大震災では、朝鮮人の犠牲者は6千人を越し、中国人も数百人殺害された。

(21) 「内乱を冀ふ心を外に移して国を興すの遠略」（西郷隆盛の板垣退助宛書簡）。

が野党の攻勢で否決、修正を繰り返していた。元勲内閣・伊藤首相らの周辺からは“国難”を打開するには、外国で大事件が起きるようなことが必要といった発言も飛び出した。しかし、彼らとて「故なき戦争を起こす訳にも参らず候ことゆえ、唯一の目当ては条約改正の一事」⁽²²⁾としていた。この日本の内政危機のときに、朝鮮南部で東学農民戦争が起きた。それに日本政府は飛びついた。果たして、「外国で大事件」勃発にはかならなかった。当初は“朝鮮の独立”を、続いて“朝鮮の内政改革”を名目に日本が引き起こしたのが日清戦争である。

・日清戦争

東学農民軍が解散し、日本軍の朝鮮駐留の理由が失われたにもかかわらず、清国軍の撤兵を朝鮮側から日本に要請させるため、1894(明治27)年7月23日、日本軍は朝鮮の王宮・慶福宮に侵攻、占領した⁽²³⁾。北陸の第6旅団(歩兵第7連隊・三好成行大佐、歩兵第19連隊・栗飯原常世大佐)に動員令が下ったのは8月4日であった。この日の富山県での応召者は2,116人で、10月までにさらに5回の召集があり、239人が召集された。第3師団(桂太郎中将)所属の歩兵第7連隊は、8月28日、金沢で大島旅団長の軍容検査をうけて29日に出発した。旅団は9月16日仁川港に上陸、第1軍(山県有朋大将)の指揮下に入った。先に上陸していた第5師団と第3師団の先遣隊は北進し平壤を攻略し、まず朝鮮半島全体を制圧した。日本軍はその後鴨緑江を渡り11月21日、清国に入って安東県に到着した。歩兵第7連隊を含む第3師団は9月19日京城を出発、悪路、厳寒、赤痢患者多数にもかかわらず26日から29日にかけて黄州、鳳山付近に集結。軍直轄となって安州に進み、兵站線の守備についた。文末資料によると、青木村の1人は激戦の盛京省田庄台で戦死しているほか、日清戦争での2町17村の戦死は13人である。

・台湾征服戦争

下関条約が結ばれ日清戦争は終わった。しかし直後に、台湾でもう一つの戦争が始まった。この戦争は3期にわけてみることができる。第1期が1895(明治28)年5月から翌1896(明治29)年3月までであり、軍事統計においても日清戦争とされている⁽²⁴⁾。第2期は、中国系平地住民の武装蜂起を弾圧した1902(明治35)年までの約7年間で、第3期が山地の先住民を軍事制圧した1915年までである⁽²⁵⁾。この時期区分に従うと郷土兵が派遣された次の(ア)は第1期、(イ)(ウ)は第2期に属することになる。

(ア) 1895(明治28)年浦山村出身者が9月台湾・大甲で戦死。小摺戸村出身者は台北病院で戦病死(文末資料参照)。

(イ) 1898(明治31)年3月8日より4月23日にわたり歩兵第7聯隊松尾傳蔵少尉以下49名は、

(22) 1894年3月27日、陸奥宗光外相から青木周蔵駐英公使宛の手紙(中塚明『近代日本と朝鮮 新版』三省堂書店、1977年、p.56)。遠山茂樹『近代日本史I』(岩波全書、1975年、p.189)。

(23) 原田敬一は、「7月23日戦争」とする。『戦争の日本史19 日清戦争』(吉川弘文館、2008年、p.33)。

(24) 大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」(『岩波講座 近代日本と植民地2』岩波書店、1992年) p.6。

(25) ただし、第3期で“平定”が終了したわけではなく、その15年後の1930(昭和5)年、台中州の霧社が、帰順させた「熟蕃」と認定されていたにもかかわらず、原住民として最後のそして最大の抗日蜂起に立ち上がった。日本軍は徹底的に弾圧した。

台湾守備歩兵第3聯隊要員として派遣され、大鞍庄付近の土軍の討伐に参加し、同地西南方山中において戦闘。戦死兵2、負傷兵3⁽²⁶⁾。

(ウ) 1902(明治35)年台湾北勢社討伐。台湾守備歩兵第9大隊第2中隊要員として派遣中の歩兵第35聯隊石崎中隊は、11月、北勢社討伐に参加。各地で“土軍”と戦闘。11月8日、苗栗^{べいりつ}寧^{とう}蘭分遣隊に急進増援すべきの命を受け、石橋中隊長は……日没後、急行軍して寧蘭に到着した⁽²⁷⁾。

・義和団戦争とその後の清国派遣

郷土部隊の出兵が確認でき、文末資料から、野中村の1901(明治34)年の戦死1名が判明した。

(ア) 1901(明治34)年、前年からの北清事変に対して「歩兵第35聯隊は、清国駐屯歩兵第4大隊本部並びに第2中隊の編成要員として、明治34年6月14日から同年11月11日の約5か月間兵員の派遣を命ぜられた」⁽²⁸⁾。

(イ)「さらに」⁽²⁹⁾ 1907(明治40)年5月29日より翌1908(明治41)年6月25日の約1年1か月間、第9中隊を基幹とする1個中隊を清国山海関に派遣した。

・日露戦争

この戦争は1904年2月の宣戦布告に始まり、ポーツマス講和条約が結ばれた1905年9月4日(日本時間では9月5日)に終結した⁽³⁰⁾ので、その期間の戦死者が多いが、文末資料にリストされた死亡期(出身地・死亡地)では、1905年10月(浦山村;盛京省江石槽舎営病院)、11月(前沢村;東京青山病院)、12月(大庄村;不明)の場合も見られる。当時の地元紙によると、富山県の兵士が多かった歩兵第35連隊は、1906年1月28日に金沢駅に帰着した。富山県兵士の従軍は、戦地に赴いた者1万9173名、内地勤務の者1,184名、合計2万357名であり、講和条約後には師団内の戦死者集計が報道されている⁽³¹⁾。

富山県の戦死将兵は2,401人⁽³²⁾で、そのうち海軍は50人であり、そのうち下新川郡の戦死者は、370名であった(「富山日報」1905年9月21日)。

一方、『入善町史通史編』は、下新川郡役所資料「明治37、38年戦役戦病死者及遺族調査表」を使って次のように記している。「下新川の戦死者のうち陸軍戦死者の57%が旅順戦すなわち盤竜山砲台をめざして突撃した人々であった。戦病死者は魚津市112名、入善町99名、黒部市77名、朝

(26) 『富山聯隊史』p.46。またp.20の「歩兵第35聯隊編年表(明治・大正編)」では、明治31年3月8日「台湾派遣中の松尾少尉以下50名大鞍庄付近において討伐」とある。

(27) 『富山聯隊史』pp.46-47。

(28) 『富山聯隊史』p.48。

(29) 同前。『富山聯隊史』は、「清国派遣」(ア)に続けて、「さらに明治40年(1907)5月29日…」と書く。『金城聯隊史』(歩七戦友会、1969年)は、「(明治一引用者)40年支那の革命後は漢口に中支那派遣隊司令官の指揮する歩兵大隊を派遣していた」(p.8)とするが、これと同年の歩兵35連隊派遣との関連は不明である。

(30) 日露戦争の経過は、『富山県史近代上』p.861以下などに詳しい。

(31) 35連隊1,786人、36連隊1,694人、19連隊約1,500人、7連隊1,394人、特科隊・直轄部隊約630人、合計約7,000人。

(32) 平成30年度富山県公文書館明治150年記念企画展の前掲パンフレットp.14の「日露戦争と富山県」で、「従軍した富山県民は2万357人、その内戦死者は2401人であった」と述べ、「富山日報」の報道を載せている。

日町 58 名、宇奈月町 20 名である」。ここでの戦病死者総数は 366 名で、先の「富山日報」の報道に近い。

・植民地征服戦争——南韓大討伐

朝鮮保護国化のため、下関条約で遼東半島の割譲を日本は狙ったが、三国干渉により失敗した。しかし、米・英・露 3 国より朝鮮保護国化の容認をとりつけ⁽³³⁾、1905 年 10 月 18 日深夜、日本は、朝鮮側に韓国保護協約（第 2 次日韓協約）を調印させ、半ば日本の植民地にした。独立を奪われた朝鮮民衆は、僅かの武器を携えその都度、義兵として立ち上がった。これに対し日本政府は 1907 年夏、高宗を退位させ、第 3 次日韓協約で韓国軍を解散させた。その軍人たちが各地で義兵に加わり義兵闘争は再び高揚したが、その鎮圧の大作戦が、1909（明治 42）年秋の「南韓大討伐作戦」⁽³⁴⁾であった。この作戦に加わるために同年 5 月 27 日、歩兵第 35 連隊（金沢）第 5 中隊及び歩兵第 69 連隊（富山）⁽³⁵⁾ 第 10 中隊は朝鮮に向かい、1911（明治 44）年 5 月 1 日、任務を終えて帰還している⁽³⁶⁾。

前述の「義和団戦争」時の派遣と同じく、この 1909（明治 42）年の朝鮮派遣は『富山県史年表』（1987 年 3 月刊）にはないが、当時の朝日新聞（東京朝刊、1909 年 9 月 3 日）は「1 日京城特派員発」の見出し「南韓暴徒討伐」で、「南韓暴徒討伐の為駐屯隊は機動演習として全羅道に出動し別に海球よりも別隊を出したれば近く一生面を開くべし」と伝え、同 10 月 27 日付は、9 月 1 日から 54 日後の「25 日京城特派員発」の「南韓暴徒討伐成功」の見出しで、「渡邊少将の率いる南韓討伐隊は捕虜 1055 人死者 334 人鹵獲銃 95 挺刀 33 口の大成績を現して引揚げたり今や 12⁽³⁷⁾の首魁を餘すのみにて始ど暴徒の接響を見ず」と伝えた。「討伐」はほぼ 54 日間で“成功”した。第 9 師団の

(33) 1905 年 7 月の桂・タフト協定、8 月の第 2 次日英同盟、9 月のポーツマス条約による。

(34) 1907 年 8 月韓国軍解散以降、1910 年の「併合」までの義兵闘争（戦争）を 6 期に区分した場合、「南韓大討伐作戦」は第 5 期に位置する（愼蒼宇「植民地戦争としての義兵戦争」（『岩波講座東アジア近現代史第 2 巻』2010 年所収、p.312）。また、『朝鮮討伐誌』に、「本年（1909 年—引用者）5 月交代帰還するに際し、……6 月新に服務したる臨時韓国派遣隊は……茲に於て南部守備管区司令官渡邊少将は一大規模の討伐を計画し 9 月 1 日より約 2 箇月に亙る討伐行動を実施し始め」（p.162）とあり、臨時韓国派遣隊は 6 月に編成を完了した。また、朴廷鎬「韓国駐劄軍と義兵闘争」「臨時韓国派遣隊」（坂本悠一編『地域のなかの軍隊 7 植民地』吉川弘文館、2015 年、p.181）も参照。

(35) 日露戦争後の軍拡で 1907（明治 40）年 10 月、第 9 師団に富山市を衛戍地とする歩兵第 69 連隊が新たに創設された。その結果、下のように既設の歩兵第 35 連隊（金沢）の徴募区域が富山県内では高岡連隊区とされ、歩兵第 69 連隊のそれは富山連隊区とされた。

- ・「高岡連隊区」富山県西部の高岡市、氷見郡、射水郡、東砺波郡、西砺波郡
石川県能登 3 郡——珠洲郡、鳳至郡、鹿島郡
- ・「富山連隊区」富山県東部の富山市、婦負郡、上・中・下の各新川郡
岐阜県飛騨 3 郡——大野郡、益田郡、吉城郡

(36) 『富山聯隊史』p.48 及び p.20 の「歩兵第 35 聯隊編年表（明治・大正編）」。尚、同じく第 9 師団に所属し石川県出身者で構成する歩兵第 7 連隊第 10 中隊は、6 月 2 日木浦上陸、羅州で守備任務についた後、「9 月 1 日より行われた南韓暴徒大討伐軍に参加し、暴徒全く屏息するに至って 12 月 31 日羅州に帰還した」（前掲『金城聯隊史』p.20）。

(37) 1 人あるいは 2 人の意と思われる。

2個中隊が編入されたのが臨時朝鮮派遣歩兵第2連隊⁽³⁸⁾であった⁽³⁹⁾が、その後も駐屯は続き、「この2年1ヵ月間は韓国併合の前後で派遣隊の任務は特に重大であり」⁽⁴⁰⁾、「派遣将兵は、一致団結よく軍紀を守り聯隊の名譽を双肩に担って、治安維持の重責を果たした」⁽⁴¹⁾と贅えている。

「南韓大討伐作戦」の作戦は猛烈な朝鮮義兵殲滅作戦であり、続く植民地化を完成させた韓国「併合」時にも富山の兵士が参画していたという認識は県民には全くない。尚、この2年間余で富山の兵隊の戦死を確認することはできない。

・韓国駐筭——第9師団の単独派遣

韓国保護条約（第2次日韓協約）による朝鮮統治を武力で進めるため、日露戦争終結直後から日本陸軍の韓国駐筭部隊が展開していた。1905年10月の第1次駐筭軍⁽⁴²⁾の後、順次守備隊が日本本土から渡ったが、1914（大正3）年4月、朝鮮守備交代⁽⁴³⁾のための第5次韓国駐筭軍に第9師団が単独派遣され、歩兵第31旅団司令部（井野口春清少将）と共に歩兵第35連隊及び歩兵第69連隊が出発した。第35連隊は石川県の七尾港から、第69連隊は富山県の伏木港から朝鮮半島に渡り⁽⁴⁴⁾、1916（大正5）年5月から6月にかけて富山に帰還した⁽⁴⁵⁾。

この2年間の駐筭地での戦闘及び戦傷死者の記録は『富山聯隊史』には見当たらないが、富山県西部と能登半島を徵募区域とする第35連隊は京城（ソウル）を中心とした朝鮮中部を担当し、その第1大隊の本部は開城⁽⁴⁶⁾に、第2、第3大隊の本部は龍山⁽⁴⁷⁾に置かれた。富山県東部と岐阜・

(38) 臨時韓国派遣隊歩兵第Ⅱ連隊第8中隊付の原進一陸軍中尉資料は、愼蒼宇「朝鮮植民地戦争」の視点から見た武断政治と3.1独立運動（『朝鮮史研究会論文集』第58集、緑陰書房、2020年10月）で考察されている。

(39) この二つの中隊の具体的戦闘行動は不明だが、『朝鮮討伐誌』によれば、渡邊少将は9月25日に第二次討伐行動を策定し、中隊が各村落の外圍を包囲し、面洞長に男子名簿を「対照点呼」させ、「疑わしきものは逮捕」し、昼に搜索した村を「夜間突然再搜索を行」うなど徹底した鎮圧の結果、指導者の沈南一、安桂洪以下、「2千余名の死傷者若くは捕獲し或は自主投降せしめ賊勢大に衰へ爾後自首者続出し」、「全羅南北道の地は茲に全く清掃せられ」（pp.166-167）たとある。

(40) 『富山聯隊史』p.48。

(41) 同前 p.48。

(42) 第13師団（高田）と第15師団（豊橋）が渡韓した。

(43) 1912（明治45）年3月1日に配置された第4次韓国駐筭師団の第8師団（弘前）と交代した（徐民教「韓国駐筭軍の形成から朝鮮軍へ」前掲坂本編『地域のなかの軍隊7』p.170の表3）。前掲『金城聯隊史』p.21。

(44) 「歩兵第69連隊の連隊長以下1622名は4月8日、富山県伏木に向かった。翌9日内地港湾出發 御用船天長丸に搭乗釜山港に向い出發す 4月11日釜山港上陸、13日各隊は本日前後3回に汽車行を以て守備地に出発。第1大隊本部及第4中隊義州（大隊本部及中隊所在地）、第2大隊（略）、第3大隊（略）平壤など〔後略〕」（『連隊歴史歩兵第69連隊（其一）自創立至大正4年10月防衛庁防衛研修所図書館蔵』『富山県史史料編Ⅶ近代下』p.1178）。

(45) 先の南韓大討伐を『富山県史年表』は全くふれなかったが、韓国「併合」後の歩兵第69連隊の朝鮮駐筭については、下新川郡軍人奨励会長が市町村に「大正3年3月11日 等九師団の朝鮮守備出發餞送会の開催」を通知し、経費の分担などを提案している。その帰還についても1916（大正5）年5月4日付で下新川郡役所は、「兵二、一三四号 朝鮮帰還兵歓迎の件」を町村長に出している（『黒部市史資料編』1994（平成6）年10月、pp.824-828）。

(46) 愼前掲「朝鮮植民地戦争」の視点から見た武断政治と3.1独立運動 p.88。

(47) 同前。

飛騨3郡の出身者で構成する第69連隊は朝鮮北部を担当した⁽⁴⁸⁾。その第1大隊の本部は義州⁽⁴⁹⁾に、第2、第3大隊の場合、平壤⁽⁵⁰⁾に置かれた。こうして第35連隊と第69連隊の警備地域も次第にわかってきた⁽⁵¹⁾。文末資料では、前沢村出身の兵士が1915(大正4)年第69連隊所属に入隊し、「1917(大正6)年朝鮮警備中、同年10月病死」⁽⁵²⁾したと記録されている。

・第一次世界大戦——青島守備に就いた第9師団

1914(大正3)年7月に開戦した第一次世界大戦で日本は連合国側に加わり、8月ドイツに宣戦布告した。日本は中国におけるドイツ租借地の山東半島や赤道以北の南洋諸島を攻撃した。その年11月、第18師団(久留米)が山東半島の要衝、青島を占領した。この青島陥落では富山県を含む全国の多くの小学校で祝賀行事が催された(後述)。占領後、ただちに青島守備隊が編成され、歩兵8個大隊の混成部隊が駐屯した。青島守備軍には1918(大正7)年、歩兵第35連隊第8中隊156名と第69連隊第5中隊が9月6日宇品を發ち派遣された。両中隊とも翌年9月28日、宇品に帰還した⁽⁵³⁾。この青島守備軍に参加したなかで郷土兵の戦死は見当たらない。

・シベリア干渉戦争

第一次大戦中の1917(大正6)年、ロシア革命が起き、ロシアが連合国を離脱した。連合国側は翌18年3月、ウラル地方に戦線構築を企図したが、これにウイソン米大統領が反対した。英仏がシベリアで立ち往生しているチェコ兵捕虜の救出という理由を見つけたので、米国もシベリアへの共同出兵を決め、日本にも要請してきた。待ち構えていた日本は、米国7千、仏国2千、中国千、英国8百の「連合軍」の総計を上回る1万2千を派遣した⁽⁵⁴⁾。

このシベリア干渉戦争には1921(大正10)年3月31日、第9師団に出兵命令が出た⁽⁵⁵⁾。第35

(48) 歩兵第69連隊兵士による朝鮮守備については別に記録がある。井本前掲書第7章「連隊への出動命令とシベリア出兵期隊内暴動」の「第29証言」で、1896(明治29)年生まれの横山藤吉さん(富山市水橋新大町535)の、「3つ年上の兄が朝鮮守備に行かされた。兄が満期になって除隊してきて丁度、わしが入隊した(大正5年。新兵は毎年12月1日入営)」(p.186)とあり、歩兵第69連隊の兵士であった横山さんの実兄が1914年5月に朝鮮駐箚隊として派遣され、1916年春に帰還したという証言である。

(49) 慎前掲「朝鮮植民地戦争」の視点から見た武断政治と3.1独立運動」p.88。

(50) 同前。

(51) 第9師団の2個連隊が帰還し、「警備任務は新設の歩兵第77聯隊に引き継いだ。同聯隊の新設にあたり、歩兵第35聯隊はその第7中隊を、歩兵第69聯隊はその第10中隊を転出させた。……なお転出した第7中隊は5月2日任を終えて聯隊に復帰したが、歩兵第69聯隊第10中隊はそのまま新聯隊に編入された。同聯隊が欠除した第10中隊を新設したのは大正7年(1918年—引用者)4月であった」(『富山聯隊史』p.50)という但し書きがある。

(52) 『前沢村史上』(前沢振興会、1980年)p.72。

(53) 『富山聯隊史』p.51。

(54) さらに9月に増派し、最大で6個師団約7万5千を派遣した。大戦が終わり各国は撤兵したが、日本は駐留を続けた。しかし、国内外から批判が高まり、1922(大正11)年6月、ようやく撤兵を表明した。

(55) 歩兵第69連隊の動きは富山日報1921(大正10)年4月1日で、「赤紙で県内の帰休兵召集される」として、動員令は帰休兵約800名のうちの一部を除き609名に發せられ、富山連隊区域の下新川郡の召集人員147名は、「(4月)5日午前9時迄……集合連隊へ入営する」ことになっていたと伝えている(『富山県史史料編Ⅶ近代下』pp.1181-1182)。

連隊第1大隊は4月23日七尾港を出帆し、30日ウラジオストクで歩兵第12連隊と守備を交代した。第2大隊は5月2日、連隊長以下その他各隊は5月3日、それぞれ金沢を出発し、七尾港からウラジオストクに向かい、5月5日上陸した。師団の警備地域は烏蘇里鉄道、蘇城支線から南は満州朝鮮国境のアムール地方に及ぶ広範囲だった。一方、歩兵第69連隊は4月25日、七尾港を出航し、27日ウラジオストクに上陸した。師団は司令部をウラジオストクに、旅団をシトコワに置いて、付近から蘇城支線の沿線を警備した。第69連隊はカンガウス、スウチャン、ウラジミロアレクサンドロエフスコエにわたる間を警備した。第9師団は、翌年1922（大正11）年8月復員を命じられ、第35連隊は9月28日に、第69連隊は10月7、8日七尾港に入港し帰還した⁽⁵⁶⁾。文末資料から戦死3名⁽⁵⁷⁾はいずれも対ソビエト・シベリア干渉戦争の従軍者とみられる。

2 郷土における戦争認識

(1) 郷土の戦争認識——自治体の郷土史本の考察

これまで明治・大正期、富山の兵士がどのような戦争にかかわってきたかを概観した。本節ではそれをふまえて地元の郷土史本の戦争認識を検討する。

本稿が対象とする富山県東部では、1960年代から1990年代にかけて相次いで郷土の通史本が発刊されている。羅列すると、『黒部市誌』（1964・昭和39年）、『入善町誌』（1967・昭和42年）、『魚津市史上巻』（1968・昭和43年）、『宇奈月町誌』（1969・昭和44年）、『魚津市史下巻』（1972・昭和47年）、『朝日町誌歴史編』（1984・昭和59年）、『追録宇奈月町史歴史編』（1989・平成元年）、『入善町史通史編』（1990・平成2年）である。この間、約25年間で日本政府の対外認識と国際政策にも大きな変化が現れた。日韓条約、日中国交正常化、日中平和宣言、河野談話、村山談話などが発表され、こうした政治・社会の情勢の影響を大なり小なり受けたものとみられる。ただ当時としては、地方の一自治体が自前で郷土史本を編纂すること自体、たいへん意義あることで、制約の多いなかで精一杯の戦争認識であったらうと思われる。

・『朝日町誌歴史編』

『朝日町誌歴史編』は、明治10年代以降の対外関係を述べた後に次のように続ける。「当時の清国は大国で「眠れる獅子」といって恐れられていたが、日本は敢然として戦いにいどんだ」と、自国が非力を顧みず、あたかも正義の戦争であったと描き、「陸路は朝鮮を北上して鴨緑江を渡り、

(56) 『富山聯隊史』p.53及びp.412。また、『富山県史史料編Ⅶ近代下』は、「軍旗先頭に連隊本部及び主隊の帰還」の富山日報1922（大正11）年10月9日記事を掲載。それは10月8日に帰還した第3大隊432名に関するもので、「歩兵第69連隊最後の帰還たる連隊本部並に第3大隊9、10、12中隊の精鋭は昨日午前11時50分富山着軍用列車で帰還した」。その日は秋雨の日曜日であったが、大勢の県民が出迎えに富山駅周辺に詰めかけ、「……軍旗は西川少尉の手に捧持されて降車した。……1年有半目の帰還が寿が如く秋風は為いて居る」（p.1183）とあり、第9師団歩兵第35連隊及び第69連隊の派遣期間は1年半であったことがわかる。

(57) 1920（大正9）年4月に大家庄村出身の陸軍中尉が「西伯利亚沿海州ハバロフスク第二陸軍病院」で死亡し、1921（大正10）年5月前沢村の陸軍三等看護長が「シベリア出征中沿海州ウラジオ陸軍病院蘇城分院」で亡くなり、1922（大正11）年8月愛本村出身者の海軍嘱託通訳がカムチャッカ オゼルナヤ沖で戦死した。

進撃につぐ進撃をつづけ、北京にせまらんとする勢であったが、清国が講和を申込んで来たので、28年4月1日李鴻章全権と伊藤博文との間で下関条約を結んで、戦争は終結した」とする。富山県の東部では帰還兵を「呉羽山新道まで出迎え、呉東軍人凱旋歓迎会」を開いたと記している。

日露戦争については、「37年2月10日日露戦争の宣戦布告があり、いよいよ世界一の陸軍といわれた露国を相手に戦争がはじまり、次々と戦死、戦傷の報が届いた⁽⁵⁸⁾。

1914(大正3)年7月に起きた第一次世界大戦では、「11月にはドイツ軍の居た青島を占領したので、泊町では11日に八幡宮で戦勝報告祭をやり、つづいて提灯行列を行って、戦勝を祝った」と記している。ただし、大戦後のシベリア干渉戦争で、下新川地方からも派遣され、戦死した実態を朝日町は把握していなかったと思われる⁽⁵⁹⁾。

・『入善町誌』及び『入善町史通史編』

『入善町誌』は「日清戦没」で、「清国という老大国に、軍備に勝算のない小国日本が立ち向かった戦いは、当時のむつかしい世界情勢下においては、実に国難到来ともいうべきもので、官民一途、挙国一致で戦った⁽⁶⁰⁾」と記し、日本が自国防衛の戦いに挑んだとみている。実際は、明治藩閥政府にとっての「国難」であった。「日露戦没」でも、日清戦争で獲得した遼東半島を三国干渉で返還させられた日本国民の怒りは正しくて、「師団を増設し、軍艦を建造するなど」して、「来るべき国難」に備え日露戦争に臨んだ。が、「世界最強の陸軍を持ち、強大なる海軍を誇るロシアとの戦いに対する国民の決意は、先の日清戦役の比ではなかった⁽⁶¹⁾」と書き、ここでも日本の対外侵略を当然視するものとなっている。

続く「泰平の夢破る」では、1914(大正8)年7月に起きた第一次世界大戦にもふれ、日本も参戦し、「青島攻略などしたが、戦争というほどのものでもなく⁽⁶²⁾」と北陸の第9師団が交戦状態になかったことを反映した記述で⁽⁶³⁾、当時の台湾や朝鮮の植民地支配などは視野の外である⁽⁶⁴⁾。本書から23年後に刊行された『入善町史通史編』の第四章第五節日清戦争では、郷土の歩兵第7連隊

(58) 8月2名が負傷。10月以降に戦死が相次ぎ、12月に常光寺で戦死者合同葬儀が行われたほか、203高地での「犠牲者は数知れず」、「殊にこの戦いで大家庄村から多数戦死者が出た」。翌1905年6月には泊町出身者の犠牲者を悼む泊町合同葬が行われた。

(59) 1923(大正12)年では、「9月1日関東大震災があり、……2、3日たつて罹災者は着のみ着のまま故郷に帰って来たので、本県では各駅に救護所を設けて……迎えた」と県内の様子にふれ、「地震の際から朝鮮人に対する警戒は田舎でも厳重に行われる状態であった」と記し、他の郷土史ではふれられていない叙述が確認できる。

(60) 『入善町誌』p.1250。

(61) 同前 pp.1250-1251。

(62) 同前 p.1253。

(63) 実際は先述したように1918(大正7)年青島守備に参画している。しかし、「大正10年(1921年—引用者)5月、シベリア出兵があったとはいえ、昭和のはじめころまでは、戦争というものを知らず、世は泰平を謳歌した」のみならず、「日本が世界の5大強国から3大強国のうちにはいったと自負したのもそのころだ」(p.1253)と述べる。

(64) 「泰平の夢をさませ」られたのは、昭和に入って1931(昭和6)年の満州事変以降であって、「わが国が軍国主義をとり、露骨な侵略戦争を拡大したのは、その時からである」(p.1253)とし、それ以前はそうでなかったという歴史認識である。

の進軍・交戦状態を叙述すると共に、各小学校の沿革誌から記録を抜粋して載せている⁽⁶⁵⁾。また日露戦争では、小摺戸村の日露戦争従軍者名簿から、「下新川郡長から充員召集令状を受けた期日とその人数」を表で載せ、「(1904年明治)37年5月から38年8月まで、動員が28回で96人が召集された」⁽⁶⁶⁾と詳細な事実を記している。また第1節「日露戦争」で先述したように下新川郡の戦病死者を表で示すほか、やはり小学校沿革誌から抜粋している。日清戦争時よりも戦争が学校の身近にやって来ている⁽⁶⁷⁾ことがわかる。

・『黒部市誌』

『黒部市誌』第一編第四章第九節で幕末維新と加賀藩のことを詳述しているが、明治以降の近代史が極めて乏しい。対外戦争などは第二編第八章「黒部市小学校沿革一覽」⁽⁶⁸⁾の年表で初めて登場する。そこに「明治27年日清戦争」、「明治37年日露戦争」、「大正14年陸軍現役将校学校配属令公布」とする。「大正三年第一世界大戦」の箇所では、「越湖浜にて青島陥落戦捷祝賀会開催し、区域小学校児童3000名参加大運動会を催す」⁽⁶⁹⁾とあり、児童にまで戦勝気分を浸透させようとした政策が見て取れる。第二編第九章第三節「戦争のころ」の「市制・町村制以後」で、その改正⁽⁷⁰⁾が1911年、1921年、1926年と行われ、西洋の自由主義、民主主義が流入し、選挙権の拡充や国家の監督権が緩和されたにもかかわらず、市制・町村制度改正の「成果が十分に挙がらないうちに、昭和6年満州事変が起こり、準戦体制に進み、昭和12年の日華事変以後は政府の政策の忠実な執行機関としての役割をになわされた」⁽⁷¹⁾と述べている。市制・町村制と帝国日本の体制の関係は検討を要するが、この第三節「戦争のころ」という表記での「戦争」は、昭和の満州事変以後を指しているらしいことがわかる。同時に明治27年の日清戦争や明治37年の日露戦争に代表される侵略戦争を棚上げにした認識があらわれている。本書の巻末には先の戦争のほか、「1900年北清事変」と「1910年日韓併合」、さらに「1915年中国に21か条の要求を出す」を載せている。

・『宇奈月町史』及び『追録宇奈月町史歴史編』

平成の市町村合併により黒部市に編入された宇奈月町の『宇奈月町史』は充実した内容だが、近代史に関しては、文末資料で載せた戦没者名簿のほかは、年表に「日清戦争おこる」、「日露戦争おこる 第九師団出征」、「第一次世界大戦おこる」、「シベリヤ出兵」と載せるにとどまっている。20

(65) 1895(明治28)年「(5月)17日、入善区域内の各小学校祝勝大運動会を、横山浜で開催した。飯野小学校の生徒500人は、海と陸と二方から会場へ参加した」ことや、戦争記念碑建設費に生徒たちが70銭余り寄付し、凱旋軍人を歓迎することが10数回もあり、授業の進度に影響も懸念されたが、精神教育上よかった等と記す。

(66) 『入善町史通史編』p.440。

(67) 明治37年、38年度の「飯野尋常小学校沿革誌」には、寺で戦時講話。旅順開城で国旗行列、祝賀運動会。奉天占領祝賀式。海戦大勝祝賀の国旗行列。戦時記念郷土歌等が記録されている(『入善町史通史編』p.442)。

(68) 『黒部市誌』pp.735-748。

(69) 同前 p.741。

(70) むしろ政府は、市制・町村制を利用して、「方針を授け国家統制の実を挙げるを得べく(市制町村制理由書)官治目的の手段として考える傾向にあった」と指摘するが、帝国憲法の発布やその翌年の教育勅語にはふれず、市制・町村制が改正されても「官治目的の手段」の「基本的性格はついに改められなかった」と指摘する。

(71) 『黒部市誌』p.872。

年後の『追録字奈月町史歴史編』（以下、『追録』と略記）は、第四章第六節二 軍事で、1894（明治27）年の日清戦争を「韓国の支配権を中国（当時は清とよんだ）と争った近代日本最初の大戦争」だったとする。この戦争で地元兵は第3師団歩兵第7連隊に所属し、9月、韓国仁川港に上陸し第1軍（司令官山県有朋）の指揮下で北上し、清国に侵入後は、大寒波のため感冒患者が続出したと記す。下関講和条約の締結後も台湾で「討伐」軍事行動が続き、浦山村出身兵士が戦死したと伝えている⁽⁷²⁾。1900（明治33）年の北清事変に関連して兵士の記述はないが、愛国婦人会設立にはふれている⁽⁷³⁾。続く日露戦争の戦場は中国大陸であり、地元兵は盤龍山の総攻撃の1904（明治37）年8月21日、10月、11月にわたる3回の総攻撃に加わり、翌年元旦にロシア側が降伏を申し入れてきて、1月2日の水師營の会見になったと述べる。当時の行政区ごとの戦死者は、文末資料から、浦山村7、内山村6、愛本村4、下立村2の合計19名であった。

また、シベリア干渉戦争の1922年8月、カムチャッカ半島オゼルノフスキー沖で軍艦の沈没で戦死した「愛本村出身の通訳官朝倉虎次郎妻繁子には、愛国婦人会富山県支部長から弔慰金が贈られた」と記している。さらに第六節一公安の「電源開発と請願巡查派出所」で、戦前の黒部川発電所建設を詳述している。苛酷な自然条件と劣悪な労働条件の現場に多数の朝鮮人が就労し⁽⁷⁴⁾、大正末期から夥しい犠牲者を出した⁽⁷⁵⁾が、『追録』はそれら朝鮮人のことを全くふれない。

・『魚津市史下巻近代のひかり』（『下巻』と略記）及び『図説 魚津の歴史』

戦前、魚津町には郡庁が置かれ富山県東部の中心地域であった。『下巻』は、第十二章「大戦下の生活」で、1931（昭和6）年満州事変から戦争のことを叙述している。ただ、第十一章「庶民の生活意識の移り変わり」の1「家庭生活」の冒頭の「明治維新と庶民生活」で魚津市民の傾向を描写しており貴重である⁽⁷⁶⁾。

さて、日清戦争は、第八章三三「確立された小学校教育」の「義務制4年の小学校へ」で、「明治33年（1900年）8月、小学校令をふたたび改正した。これは、日清戦争によって、わがくにが……」⁽⁷⁷⁾の箇所初めて出てくる。また、4「義務教育の発展」の冒頭で、「明治37-38年（1904-1905年）の日露戦争の後、わが国は東洋の日本から世界の日本の地位に躍進し、……急激な社会の発展をみることになった」⁽⁷⁸⁾と述べ、大陸への侵略戦争を肯定的に叙述する。また四「戦時教

(72) また政府が日清戦争で地方に軍事公債を押し付けたが、富山県及び愛本村が応募目標額に満たなかったことが明かされている（『追録』p.482）。

(73) 『追録』p.489。

(74) 戦前の黒部川発電所工事と事故については、瓜生俊教編『富山県警察史上』（富山県警本部、1965年）、「富山日報1938年12月29日」、内田・此川・堀江『黒部底方の声』（桂書房、1992年）、奥田淳爾『黒部奥山と扇状地の歴史』（桂書房、2000年）、清水弘『真説「高熱隧道」』（北海道地区自然災害科学センター報告、1992年、vol.7、pp.37-52）を参照。

(75) 同時に『追録』には、地元宇奈月に流入し、居住する発電所労働者（朝鮮人と思われる）の増加による悪影響を危惧する様子が記されている。

(76) 「ご維新」になっても魚津の人びとの生活には、「上から与えられた民権も自由もなかなか届かず、……さむらいの時代とあまり変わらなかった」ことや、学制開始後も小学4年修了は極端に少ない等と伝えている（p.771）。

(77) 『魚津市史下巻近代のひかり』p.468。

(78) 同前 pp.469-470。

育への歩み」では、「日露戦争後、日本の資本主義は大きく発展し、軍事力を背景にして、アジア大陸へ進出することになる。その反面、国内には「個」の自覚が強くなり、……各種の社会問題が生じた」⁽⁷⁹⁾と対外“進出”に問題はなかったが、国内に問題があったとする。さらに、「この（第一次世界—引用者）大戦は、一時日本に好況をもたらし、資本主義を一段と発展させたのであった……」⁽⁸⁰⁾とする。

一方、2012（平成24）年刊『図説 魚津の歴史』は日清戦争前の魚津では、漁夫・車夫・人足・土方などの常食は豆腐のカラであったこと、質屋は1円の品物を預けても30～40銭しか融通してくれず、「そのため庶民は大臣らの起した戦争で若い者が死に、大国清国との戦争は敗北必至で戦費は無駄になるとして、戦争を歓迎しなかった」⁽⁸¹⁾と記している。その反面、「下関条約の批准が伝えられた28年5月9日は、喜びの興奮に湧いた。凱旋兵士への接待も盛況であり、小学校に教材として下賜された戦利品が清国への「蔑視」観を定着させた」⁽⁸²⁾とし、明治中期の日清戦争以降の中国「蔑視」の風潮を指摘している⁽⁸³⁾。

日露戦争については、1904（明治37）年「5月7日に富山県の兵士が属する金沢第九師団に最初の動員令が下った」とし、日露戦の戦死者が日清戦争と桁違いであったと記す⁽⁸⁴⁾。

（2）郷土の戦争認識——郷土史本の特徴

第1節で明治・大正期における富山の兵士たちの対外戦争への動員・派遣を概観し、それをふまえて第2節（1）では、戦後刊行された郷土史本にそれがどのように反映されているかを見てきた。この考察から近代に起きた戦争に対する見方に一定の傾向を読みとることができる。

まず全体として、日本の起こした、あるいはかかわった明治・大正期の戦争が対外侵略戦争であったという認識は弱い。むしろ、多くの場合、祖国防衛戦争とみる。山県有朋にみられる主権線・利益線といった日本の対外侵略を正当化する明治政府の危機意識に煽られたせいであろう。戦争を継続しつつ、あるいは戦争後に台湾と朝鮮では武力統治を行い、植民地化のために設置した総督府あるいは統監府という語句自体、全く現れて来ない。それと関連した歴史事象である「日韓併合」を記している場合が僅かにあるだけである。これらのことから、郷土史本の戦争に対する認識は、第一に、明治期の日清戦争、日露戦争については概ね“自国防衛戦争”という認識である。第二に、明治期の義和団戦争、大正の第一次世界大戦及びシベリア干渉戦争については、他の帝国主義国との同盟関係が契機となって参戦した“同盟による参戦”という認識である。第三に、ただ他

(79) 同前 p.471。

(80) 同前 p.471。

(81) 『図説 魚津の歴史』 p.167。

(82) 同前。

(83) この点は前掲『入善町誌』でも、「支那人のことを「チャンコロ」とか、「チャンチャンボウ」とかいったのは、当時敵愾心をそそっていわれた言葉で、戦後もながく使い残された」(p.1250)と伝えている。

(84) 「旧魚津町の日清戦争の応召者は計62人（内28人出征）、内戦病死者3人であったのに対し日露戦争では応召者410人で内戦病死者42人で規模が1ケタ上がった（p.168）。

国に対する侵略戦争という認識は希薄で、それが僅かにあった場合も1931（昭和6）年の満州事変以降である。第四として、台湾及び朝鮮に対する侵略、武力統治、植民地支配という認識は皆無である。

おわりに——「15年戦争」論と「植民地戦争」論

学校現場にいた筆者にとって昭和の戦争とは「15年戦争」のことであり、これと明治以降の日清戦争にはじまる朝鮮、台湾の侵略、植民地化と義兵闘争などの抗日抵抗運動は別次元のものと認識していた。しかし今回、本特集の企画趣旨として（本誌「特集にあたって」参照）、『「植民地戦争」の視座からみた近代日本の「戦争」』の認識に接し、私の理解していた「15年戦争」論との関連を思った。「15年戦争」論⁽⁸⁵⁾の場合、富山の兵士の戦場は、中国や南太平洋、北太平洋、フィリピン、インドネシア、ベトナム、インドなどであったが、本稿で見たように明治・大正期のそれは、台湾や朝鮮・韓国、山東半島（青島）、シベリアに及んでいる。

では、「15年戦争」論と「植民地戦争」論とは隔絶した議論なのだろうかと考えると、そこに内的紐帯とでもいえる手掛かりがある。それは、「15年戦争」の呼称の提唱と普及に尽力した江口圭一⁽⁸⁶⁾自身、(i)「『15年戦争』というとらえ方の本来の意図と意味は、日本の中国への侵略とその責任をはっきりさせることにあった」⁽⁸⁷⁾と説明しているからである。「中国への侵略とその責任」を朝鮮あるいは台湾のそれに置き換えることは、本稿で明治・大正期の戦場・戦争を追体験した者には容易い。また江口は、姜徳相『関東大震災』について、(ii)「殺戮と虐殺に狂奔する日本民衆の残虐で醜悪な姿を白日のもとにさらけだし」⁽⁸⁸⁾たと評価した後につけて、(iii)「朝鮮人虐殺者としての日本民衆と15年戦争下の中国人への加害者としての日本民衆とが、同一の線で連なっていることを否定するのは困難であろう」⁽⁸⁹⁾と指摘する。

(i) (ii) (iii) からいえることは、江口「15年戦争」論における「侵略と（加害）責任」は、1931年9月から1945年8月における15年間に限定されるべきではないということである。それは、「日本近現代史の最大の問題」という位置づけからもいえる。また「日本近現代史」の戦争における侵略と（加害）責任の“起点”は当然、1894年の日清戦争となる。さらに、「15年戦争」論

(85) 今日、「15年戦争」は市民権を得たと思われる。郷土史本においても『朝日町誌歴史編』と『入善町史通史編』が叙述に取り入れている。しかし、前者には侵略と（加害）責任の認識は弱い。

(86) 江口圭一の「15年戦争」論の骨格を安井三吉が次のように整理している。「15年戦争」は、①日本の中国、朝鮮その他アジア諸地域にたいする侵略と加害こそ、日本近現代史の最大の問題だという認識であり、②1931年9月の柳条湖事件から1945年8月の日本の降伏に至る過程がひとつながりの戦争としてとらえられなければならないとし、③満州事変から日中全面戦争へ、日中全面戦争からアジア太平洋戦争への拡大は、「不可避的」あるいは「必然的」であったとはいえないとする考えである（安井三吉「『十五年戦争』と『アジア太平洋戦争』の呼称の創出とその展開について」（『現代中国研究』第37号、2016年）。

(87) 江口圭一『15年戦争研究史論』校倉書房、2001年、p.101。

(88) 江口前掲書 p.98。

(89) 江口前掲書 p.99。日本民衆の侵略、植民地責任にも通じる提起である。

の視点は、侵略、抑圧された被統治者のものであり、法廷の論戦⁽⁹⁰⁾でも示されたことを想起するとき、朝鮮の義兵闘争や台湾住民の抗日抵抗闘争の全期間——多くの場合ゲリラ戦⁽⁹¹⁾である——が正当に評価されなければならない。こうして日清戦争以降、1945年の日本の全面降伏までの「その間は継続した戦時、または準戦時の「50年戦争」というべき状況にあった」との理解に達することになるのではなかろうか。

今後は、従来の「15年戦争」論の制約を越えて「植民地戦争」認識に進むことが求められる。今回は富山県東部の地域に限定して、兵士の戦場と郷土の戦争認識をみてきたが、今後はさらに富山県内、北陸全体に裾野を広げて考察し、その責を果たしたい。

(むらかみ・くにお 一般社団法人黒部川扇状地研究所)

(90) 家永教科書裁判第一次訴訟第二審（東京高裁）で1983年、江口が原告側証人に指名され、国側から「昭和6年9月柳条溝事件、終戦が20年8月ということになると、……その間戦争がいつも同じような状態で行なわれたということではなさそうだし、……」（江口前掲書 p.337）との尋問を受けた。その後、最後に控訴（附帯被控訴）本人、家永三郎から江口に補充尋問があった。「家永 この……戦争が継続していたか、いなかったかということが尋問にあったかと思いますが、中国政府は「満州国」の独立を承認しておりましたか。江口 していません。家永 その「満州国」の国内において15年戦闘が完全に停止されておりましたか。江口 停止されていた年は絶無だったと思います。家永 中国領土である「満州国」の域内においては15年戦争が継続していたと。江口 反満抗日の戦いが行なわれておまして、非常に組織的に……ありました。」（同前 pp.340-341）。江口「15年戦争論」の「侵略と加害」が、絶え間なく継続していたことは、「満州国」を不承認であった中国政府から見ても、「満州国」から見ても自明のことであった。

(91) 満州事変以降、華北分離工作が展開され、その継続中に起きた盧溝橋事件が契機となって日中全面戦争に至ったとする「15年戦争」論に対する批判者に対し江口は次のように反論する。1933年5月の「塘沽停戦協定をもって満州事変が終結したとし、日中戦争との間に断絶があるとする見解は、正規軍相互間の戦争のみを戦争とみなし、ゲリラ戦争を戦争と認めないと主張することによってのみ成立する。しかしこのような主張は、反満抗日戦争を先駆とし、日中全面戦争下の華北での遊撃戦で本格的に展開され、第二次世界大戦後一般化するゲリラ戦争がまさに現代の戦争の一典型であることを無視するものであろう」江口『日本帝国主義史研究』（青木書店、1998年、p.282。初出「盧溝橋事件への道」『日中戦争と日中関係』（原書房、1988年）。「15年戦争」論の枠内ではその通りだが、しかし近代日本史を概観すれば、台湾、朝鮮における抗日抵抗闘争はまさしく「ゲリラ戦争」であった。慎蒼宇「朝鮮の義兵将」『講座東アジアの知識人2』（有志舎、2013年）も参照。

資料 富山県東部 2 町 17 村における戦没者記録（明治・大正期）

この資料は、1960年代から2000年代に刊行された郷土史（誌）のうち、明治・大正期の戦没者の戦死地及び命日を記載したものを抽出したリストである。図書館などで調べた結果、戦前の行政区である2町17村（現在は魚津市、黒部市、入善町、朝日町）で確認できたものである。行欄右に（調）とあるのは、今後、調査が必要の意。明記していないリストは、『入善町誌』（1967年）及び『宇奈月町誌』（1969年）による。

大家庄村 『大家庄郷土誌』昭和8年9月30日初版発行、昭和58年12月1日追録（一）発行

1904	明治 37	1	1	大久保 理左衛門	戦死	
1904	明治 37	2	11	中山 六之助	戦死	
1904	明治 37	7	7	井口 市次郎	清国	柳樹宅
1904	明治 37	7	7	林 竹谷	戦死	
1904	明治 37	7	7	広田 恒次郎	戦死	
1904	明治 37	8	21	森川 仁太郎	戦死	
1904	明治 37	8	24	能島 条次郎	戦死	
1904	明治 37	10	25	堂用 清次		
1904	明治 37	11	26	中島 源次郎	戦死	
1905	明治 38	3	1	川端 常次郎	戦死	
1905	明治 38	3	5	藤井 吉次郎	戦死	
1905	明治 38	8	21	鍋谷 与三次郎		
1905	明治 38	12	27	藤田 三次郎		

1920	大正 9	4	11	林 勢松		西伯利亞沿海州ハバロフスク第二陸軍病院
------	------	---	----	------	--	---------------------

前沢村 『前沢村史上』前沢振興会、1980年

1897	明治 30	7	4	林 久助		金沢旅団病院		日清戦争との関連（調）
------	-------	---	---	------	--	--------	--	-------------

1900	明治 33	3	2	中村 助次郎		広島衛戍病院	義和団戦争との関連（調）	7月8ヶ国連合軍が天津
------	-------	---	---	--------	--	--------	--------------	-------------

1904	明治 37	7	28	中野 巳之次郎	清国	分水嶺	
1904	明治 37	8	19	朝倉 元作	金沢予備病院	病死	
1904	明治 37	8	21	松倉 覚次郎	旅順攻撃	盤竜山	
1904	明治 37	10	8	朝倉 敬作	旅順攻撃	戦傷揚家屯野戦病院で戦死	
1904	明治 37	11	26	高橋 源十郎	旅順攻撃盤竜山		
1904	明治 37	11	26	松倉 関次郎	旅順攻撃	二龍山	
1904	明治 37	11	30	中谷 石次郎	遼陽方面の戦闘に参加		瀧正羅病院で死
1905	明治 38	3	8	松田 力次郎	奉天会戦	八家子	
1905	明治 38	3	8	森山 太次郎	奉天会戦		

1905	明治 38	3	9	朝倉 仁次郎	奉天会戦	戦傷沙山令保病院で死	
1905	明治 38	11	14	中村 栄太郎	日露戦争参加		東京青山病院

1917	大正 6	10		中田 留吉	病死	1915（大正 4）年 69 聯隊へ入隊，大正 6 年朝鮮警備勤務中，同年 10 月病死	
------	------	----	--	-------	----	--	--

1918	大正 7			鍛冶 周作	印度洋にて海上戦闘訓練中（春日艦），大荒の中で通風塔整備中公傷死		
------	------	--	--	-------	----------------------------------	--	--

1921	大正 10	5	3	中谷 與二郎	病死	シベリア出征中沿海州ウラジオ陸軍病院蘇城分院	
------	-------	---	---	--------	----	------------------------	--

大布施村 『大布施村誌』大布施振興会，1985 年

1904	明治 37	7	30	得能 与次郎	清国		
1904	明治 37	8	22	長谷川 喜三右衛門	清国		

西布施村 『西布施郷土史』1982（昭和 57）年 12 月

1895	明治 28	5	29	畠山 甚作	似島	戦病死	
------	-------	---	----	-------	----	-----	--

1904	明治 37	9	26	林 與助	中国	盤龍山	戦死
1904	明治 37	9	26	村椿 杉次郎	盛京省	一戸堡壘	戦死
1904	明治 37	11	13	高木 与三	盛京省	二龍山砲台	戦死
1904	明治 37	11	15	浦木 吉郎	盛京省	一戸堡壘	戦死
1904	明治 37	12	22	西尾 次郎助	中国	盤龍山	戦死
1905	明治 38	3	1	山沢 与次郎	中国	四方台	戦死
1905	明治 38	3	6	川上 助次郎	中国	須張屯	戦死
1905	明治 38	10	11	紙谷 長之助	中国	大相屯	戦病死

1923	大正 12	6	2	畠山 豊吉	呉海軍病院		戦病死
------	-------	---	---	-------	-------	--	-----

片貝谷村 『片貝郷土史』片貝公民館，1997 年

1897	明治 30	2	26	瀧川 友次郎	清国彰化分病院		日清戦争戦病死
------	-------	---	----	--------	---------	--	---------

1904	明治 37	8	22	平林 長作	清国	盤龍山山東砲台	戦死
1904	明治 37	8	22	谷越 九郎助	清国	盤龍山山東砲台	戦死
1904	明治 37	10	10	谷口 孫市	清国	二龍山付近	戦死
1904	明治 37	11	26	沢崎 彦左工門	清国	盤龍山山東砲台	戦死
1904	明治 37	11	26	大越 甚造	清国	盤龍山	戦死

1905	明治 38	3	8	三井 亀次郎	清国	奉天省	戦死
1905	明治 38	3	8	小坂 次郎八	清国	奉天省	戦死
1905	明治 38	3	10	山本 作助	清国	盛京省	戦死

浦山村

1895	明治 28	3	8	福島 菊次	奉天省	大小方士屯
1895	明治 28	9	14	田中 寅次郎	台湾	大甲

1904	明治 37	11	26	紙田 林次郎	盤竜山	東旧砲台支那圍廊附近
1904	明治 37	11	26	古田 作次郎	清国	松樹山補備砲台
1904	明治 37	11	26	松木 長蔵	盤竜山	
1904	明治 37	11	26	中 宇之吉	盤竜山	『町史』明治27年と誤記
1905	明治 38	10	6	新保 繁次郎	盛京省	江石槽舎營病院
				井川 菊次郎	日露戦争	旅順口 慰霊碑に刻銘
				木戸 助次郎	日露戦争	旅順口 慰霊碑になし

1914	大正 3	1	9	松本 寅吉	中華民國河南省涉県鳴々鋪東方2軒地点
------	------	---	---	-------	--------------------

1918	大正 7	9	29	河村 信行	熊本陸軍病院
------	------	---	----	-------	--------

下立村 『下立村史』下立地区自治振興会，2004（平成16）年

1904	明治 37	8	22	福井 友次	清国	盤竜山附近
1905	明治 38	3	1	前坂 安次郎	清国	奉天省 四方台附近

1926	大正 15	1	2	山本 国雄	本州	南方海面
------	-------	---	---	-------	----	------

内山村

1904	明治 37	7	30	広長 五郎左衛門		清国除家屯附近
1904	明治 37	9	11	山田 浅次郎	清国	盤竜山
1904	明治 37	11	26	竹山 次郎	盤竜山	旧砲台
1905	明治 38	3	8	竹山 関之助	奉天省	八家子附近
1905	明治 38	3	8	山形 定治	清国	奉天省八家子附近
1905	明治 38	3	20	岩田 竹次郎	清国盛宗省	茨輪坨兵站病院

愛本村

1895	明治 28	6	30	長沢 岩松	記載なし
------	-------	---	----	-------	------

1902	明治 35	10	5	佐々木 喜三郎	記載なし。義和団戦争との関連（調）
1902	明治 35			佐々木 二次郎	記載なし。義和団戦争との関連（調）。遺族会記録

1904	明治 37	8	21	佐々木 浅次郎	盤竜山	二次郎と兄弟	
1904	明治 37	8	22	佐々木 三次郎	盤竜山		旧砲台附近
1905	明治 38	3	8	佐々木 憲綱	奉天省		大小房土屯
1905	明治 38	7	27	立花 清徹	樺太ルイコワ		

1922	大正 11	8	26	朝倉 虎次郎	カムチャッカ オゼルナヤ沖
------	-------	---	----	--------	---------------

旧入善町

1904	明治 37			田中 興吉		
1904	明治 37			竹内 辰次郎	清国	盤竜山
1904	明治 37			五十里 啓太郎	青泥窪	兵站病院
1904	明治 37			柏原 興三七	記載なし	
1904	明治 37			広岡 千之助		
1904	明治 37			松野 勝蔵（造）	盛京省	盤竜山
1905	明治 38			宝田 伊三	盛京省	張土屯
1905	明治 38			金沢 二太郎	盛京省	大小方土屯
1905	明治 38			船平 米松	盛京省	八家子
1905	明治 38			金田 岩次郎		

1922	大正 11			橋元 定雄	対島方面	
------	-------	--	--	-------	------	--

上原村

1894	明治 27			宝田 岩次郎	記載なし	
------	-------	--	--	--------	------	--

1904	明治 37			目沢 佐野	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			松田 幸左衛門	盛京省	
1904	明治 37			小林 伊三	盛京省	一戸堡壘
1904	明治 37			杉原 初次郎	揚家屯	野戦病院
1904	明治 37			小林 辰次郎	揚家屯	野戦病院
1904	明治 37			古本 久次郎	清国	東盤竜山

青木村

1895	明治 28			松田 松次郎	盛京省	田庄台
1904	明治 37			高澤 重次郎	清国	
1904	明治 37			木本 松之助	清国	盤竜山
1904	明治 37			高澤 吉次郎	盛京省	野戦病院
1904	明治 37			本多 由次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			野坂 長次郎	広島予備病院	
1904	明治 37			上浦 文次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			沼田 清作	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			上野 外次郎	盛京省	二竜山
1905	明治 38			志摩 久次郎	盛京省	H高地
1905	明治 38			裏田 清次郎	盛京省	H高地
1905	明治 38			荒田 竹次郎	奉天省	療養所
1905	明治 38			笹島 二三	盛京省	造化屯
1905	明治 38			島田 秀一	奉天省	
1905	明治 38			大川原 次平	奉天省	八家子
1905	明治 38			飛島 辰次郎	広島予備病院	

飯野村

1904	明治 37			飯作 善次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			松島 竹次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			広瀬 豊次郎	盛京省	長嶺子定立病院
1904	明治 37			永田 鉄之助	清国	盤竜山旧砲台
1904	明治 37			吉野 幸次郎	清国	盤竜山
1904	明治 37			寺崎 源次郎	清国	盤竜山
1904	明治 37			藤田 文造	清国	烏帽子山
1905	明治 38			永井 長次郎	奉天省	八家子
1905	明治 38			鍋島 亀次郎	奉天省	八家子
1905	明治 38			長谷 津次郎		
1905	明治 38			熊野 二之助	清国	郭三宅
1905	明治 38			中易 善次郎	清国	盤竜山砲台

1912	大正元	11	7	野寺 輝雄	房総湾沖	
------	-----	----	---	-------	------	--

1921	大正 10	3	17	新田 門庄	舞鶴	海軍病院
------	-------	---	----	-------	----	------

新屋村

1904	明治 37			白又 理平	盛京省	凹字山
------	-------	--	--	-------	-----	-----

1904	明治 37			橋本 嘉之	清国	篠家屯
1904	明治 37			中易 柴城	清国	盤竜山
1904	明治 37			稲場 久之助	盛京省	青泥窪兵站病院

柵山村

1904	明治 37			青木 幸平	盛京省	竜眼北方角面堡
1904	明治 37			島 三次郎	盛京省	揚家屯
1904	明治 37			大田 長太郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			草 長松	清国	盤竜山
1904	明治 37			谷 五之次郎	清国	盤竜山
1904	明治 37			野口 常次郎		
1905	明治 38			紺田 勝次	清国	望台附近
1905	明治 38			尾田 駒次郎	清国	馬三家子定立病院

横山村

1895	明治 28			中山 称名	清国	H 高地
1895	明治 28			神子沢 久次郎	広島	
1895	明治 28			神子沢 久太郎	遼東半島	似島避病院

1904	明治 37			濱瀬 直	清国	盤竜山東旧砲台
1904	明治 37			金澤 市造	清国	盤竜山東砲台
1904	明治 37			廣田 清左工門		
1904	明治 37			永井 伊次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			舟根 伊吉	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			松原 栄次郎	盛京省	竜山東旧砲台
1904	明治 37			松原 與助	盛京省	二竜山
1904	明治 37			柳沢 葎次郎	清国	長嶺子定立病院
1904	明治 37			若島 清次郎	盛京省	二竜山
1905	明治 38			伊林 鶴吉	盛京省	大石橋兵站病院
1905	明治 38			大野 菊次郎	清国	H 高地附近
1905	明治 38			杉本 嘉之次郎	韓国富寧	患者療養所
1905	明治 38			杉本 宅	金沢予備病院	
1905	明治 38			寺林 文作	盛京省	青泥窪兵站病院
1905	明治 38			寺林 和七	奉天省	沙河子定立病院

1905	明治 38			長谷川 忠三郎	奉天省	造化屯
1905	明治 38			古草 三次郎	奉天省	造化屯
1905	明治 38			柳沢 六郎左衛門	奉天省	尚左衛門

小摺戸村

1895	明治 28			柳沢 与太次郎	台北	兵站病院
------	-------	--	--	---------	----	------

1904	明治 37			伊林 重次郎	盛京省	盤竜山
1904	明治 37			佐竹 佐之	盛京省	八里庄
1904	明治 37			寺林 与之助	盛京省	
1904	明治 37			梨木 直次郎		
1904	明治 37			上野 米次郎		
1904	明治 37			藤川 秀太郎		
1904	明治 37			橋場 武次		
1905	明治 38			梨木 要次郎		
1905	明治 38			魚津 要作		

旧舟見町

1895	明治 28			山崎 繁	本籍地	
------	-------	--	--	------	-----	--

1900	明治 33			安久 捨次郎	金沢衛戍病院	義和団戦争関連 (調)
1900	明治 33			小森 文次郎	台湾海峡	義和団戦争・厦門事件関連 (調)

1904	明治 37			樽井 五郎七		
1904	明治 37			徳光 外次郎		
1904	明治 37			樽井 由松		
1904	明治 37			盛山 栄光		
1905	明治 38			青島 文作		

野中村

1901	明治 34			南地 袖三	奉天	
------	-------	--	--	-------	----	--

1904	明治 37			川畑 源次郎		
1904	明治 37			舟本 源次郎		
1904	明治 37			前田 助右衛門		